

氏名（本籍）	高 宮 洋 子（神奈川県）
学位の種類	博 士（美術）
学位記番号	博 美 第 82 号
学位授与年月日	平成12年 3 月 24日
学位論文等題目	〈作品〉興福寺阿修羅像現状模造 〈論文〉文化財（彫刻）修復に使用される新しい素材について －耐候性改善漆の応用－

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教 授（美術学部）	長 澤 市 郎
（論文第1副査）	”	”（ ” ）	田 淵 俊 夫
（作品第1副査）	”	”（ ” ）	山 本 正 道
（副査）	”	助教授（ ” ）	辻 賢 三

（論文内容の要旨）

本研究の論旨は、我が国彫刻文化財修復に用いられて来た素材（漆）について、現代的視野からの問題提起と、新素材の発見及びその可能性を実証した研究である。

明治時代後期から本格的に始まった我が国彫刻修復において、それまで使われていた膠に代わり漆が主役となった。以来約100年を経て漆を用いた修復方針が確立しているが、それに対し新たな視点からの検討が必要になっている。

その視点を切り口に、実験、模造を通して証明した研究である。

論文は七章で構成され、

- 1 章 修復技術材料と文化財保存修復理念の流れ
- 2 章 修復観の相違について
- 3 章 漆の改質の歴史
- 4 章 耐候性改善漆（ジス漆）について
- 5 章 耐候性改善漆比較実験
- 6 章 模造による実践的考察
- 7 章 結果、考察

から成り立っている。

文化財修復に、漆を修復材料に用いている国は日本だけであり、他国では漆に対する知識、技術は無いと言って良い。

日本から漆を素材にした文化財が数多く世界中に流出し、各国の美術館で保管展示されているが、痛んだ作品を修復する技術が皆無であり、修復不可能とされている現実に着目し、新素材の

必要を痛感した。

文化財修復に際し世界共通の原則は、オリジナル部分には絶対手を加えない、将来の再修理に備え再溶性を有する材料であることが求められている。

本研究はこの視点に立って漆を再検討し、漆と同等の性質を備えた素材の発見と、その材料の文化財修復への応用の可能性を追求し、人工素材である「耐候性改善漆」（以下改善漆と呼ぶ）をその代替品に設定し、実験と模刻作品制作の画面から研究を進めた。

改善漆は天然漆の主成分であるウルシオールを抽出しイソシアネートを添加した人造素材である。漆の主成分で構成されているが漆とは全く別の素材である。

使用に際しての利点も多い。再溶性については漆と同様であり、この点に関して新発見は得られなかったが、修復に際し漆と新素材を併用した場合の判別方法までを実験により確かめた。公開されている研究成果も殆ど無く、試行錯誤を重ね実験と模刻制作を並行させた。

新素材を用い脱乾漆技法を用いて興福寺阿修羅像模造制作を行った過程の記録を述べ、耐候性改善漆が、塑型材として、接着剤、塗料として天然漆に遜色ない文化財修復材料の一つであることを証明した。